

大学の課外体育に関する一考察(その1)

— 一般学生の課外体育について —

西尾貫一

今日、課外体育は正課体育とあいまって大学の体育を形成すると同時に、学生の課外活動においても、重要な位置をしめていることは周知の通りである。然し、現実には大学体育協議会の課外部会においても、厚生輔導専門研究会においても、「如何にして学生の課外体育を管理するか、どのようにして奨励するか、」ということについて数年来研究を続けてきていることから推測されるように、体育の面でも、課外活動の面でも決して満足すべき状態にはなっていないのである。

一見、大学生はスポーツを愛好し、スポーツは盛んにおこなわれているようにみえるが、事實は必ずしもそうではない。種々の競技会が数多く実施され、学生選手が活動していることがマスコミによって報導されるので、あたかも大いにおこなわれているようにみられるのであって、実情は、学内でスポーツ活動に参加する学生の数、並に顔ぶれからみてもそれほど活況を呈しているものではないことが知られよう。このことは大学基準協会報 36 号に、「過去の経験からするならば弊害の伴う対外競技にはむしろある程度の管理・統制を必要とし、あまり普及していない学内体育活動には積極的な奨励援助を必要とするであろう¹⁾。」と指摘される所以のものであって、対外競技をおこなっている運動部についても、一般学生の課外におけるスポーツ活動についても、まだまだ検討すべき問題があるわけである。

大学の課外体育についてはこのように多くの問題があるが、今回は一般学生の課外体育について、特にその実践の実情と、不振の原因について夫々調査検討した結果を報告する次第である。

I 一般学生の課外スポーツ活動

1) 調査方法

昭和 32 年東京大学教養学部文科系二年の男子学生を対象として、春のシーズンの終りである 6 月末、調査当日の正課体育の時間に体育教官の指導の下に、質問紙法を用いて実施、運動部員を除く、183 名の回答を整理したものである。

2) 一般学生の課外スポーツ活動の実情

この調査の対象となった 183 名の学生は「スポーツが一般の学生の生活に必要なと思うか」という問題について、91.8% が「必要である」と回答し、「不必要」という回答はしなかったということをまず報告しておきたい。

(1) 春のシーズンにおける課外スポーツ活動

おこなった	141 名	77 %
何もやらない	38 "	20.7 "
無記入	4 "	2.2 "

実施の程度 (141 名について)

イ. 毎日のように	17 名	12 %
ロ. 週二回平均	48 "	34 "
ハ. 週一回程度	67 "	47.5 "
ニ. 学内競技会丈	9 "	6.3 "

というようなことで、学生々活にスポーツが必要であると理解しながらも日常余り活発に実践してはいないという実情であると解釈される。

(2) スポーツ活動をおこなったと回答した学生のうち、(ロ)、(ハ)、(ニ)、程度しか実践しなかった 124 名について、その理由をみると、

「暇がない」ということが最高の頻度を示しており、「適度と思うから」という理由がこれに次いでいる。

* KAN-ICHI NISHIO: A Study on the Extracurricular Physical Trainings in a University.

暇がないから	61	49.6%
適度と思うから	45	36.2 //
用具がないから	14	11.2 //
金がないから	4	3.2 //
身体が悪いから	3	2.4 //
相手がないから	20	16.1 //
場所がないから	14	11.2 //
無記入	22	17.7 //

このような傾向が東大だけでなく他の大学にもみられるものか、各大学の実情についても承知するために東大の調査を原案として、東京周辺の明治、慶応、都立、教育大等国公私立 13 大学の学生について実施した課外部会の調査結果を引用すると、

対象となった男子学生 2278 名について「学生生活にスポーツが必要である。」とするもの 91.1% と大体同様の傾向を示しているが、スポーツ活動の実情については、

(1) 春のシーズンにおけるスポーツ活動

おこなった	1388 名	61. %
何もやらない	781 //	34. //
無記入	109 //	5. //

実践の程度

(イ) 毎日のように 232 名 (16%) に対して、(ロ), (ハ), (ニ) 1088 名 (78%) 不明 68 名 (6%) というようなことで、やはりスポーツの必要性について理解しながら実践の度が余り高くない傾向をみせている。

(2) (ロ), (ハ), (ニ) の理由についても、「暇がないから」ということが、600 名 (55.1%) と最高の頻度を示して、「適度と思うから」という理由が、290 名 (26.6%) とつづき、以下も大体同様の項目が列挙されている。

このようにして全体としては大略東大の場合と同様の傾向を示していることが承知されたのである。

II 一般学生の課外スポーツ活動の問題点

1. 不振の理由について

学生が以上のように一応の理解と関心を持ちながら何故課外にスポーツを余り実践しないのかという問題に考えを進めてみると、結局先の (ロ), (ハ), (ニ), の場合にあげられた、「暇がない」「適度と思う」「施設・用具がない」「相手がない」というようなことが理由として考えられる訳である。福岡学芸大の高崎氏のグループが九州の諸大学の学生を対象にして実施された課外スポーツについての調査でも、

- 勉強その他で暇がない。
- 機会がなかなか得られない。
- 用具施設が不十分。
- 金がかかりすぎる。

というような理由があげられていると報告³⁾されている。また厚生補導専門研究集会で検討された結果、課外活動を阻害している要因は、学生の側においては、「認識、並に興味の不足」, 「時間の不足」であると説明されたのである。

以上が一般学生の課外に余りスポーツ活動をしな理由として考えられるところである。

2. 時間の問題について

このなかで共通してあげられ、しかも高率を示している時間の問題については日常見聞する学生の生活から果してその通りであろうかと疑問視され、納得し難いのである。

そこで一般学生の生活時間についてみると東大の場合は学生部の調査によると、

○平日における教養学部学生の生活時間³⁾

- A. 睡眠・食事・入浴・休養等, 10 時間
- B. 読書・教養・娯楽・交際・スポーツ
2 時間 15 分
- C. 自習
3 時間 15 分

ということになっており、課外部会の調査による東京周辺の国公立大学の学生も B 項について少くとも 2~3 時間を使用しているのであるから、学生が本当にスポーツ活動をしようと思えば時間があるとも言い得るのではないだろうか。

3. 理由の検討

一般学生の課外におけるスポーツ活動が余り盛んでない理由の検討の予備的段階として、「何故

余り実践しないのだろうか」というテーマで、昭和32年の5月教養学部の学生50名に自由に書かせたところ、スポーツ活動をする為の用具・施設についての不足・不満をあげると同時に、

- 何もしないでも病気になるからわざわざやらなくてもよい。
- わざわざかけていってやるのは面倒だ。
- スポーツは楽しむものだから気のむいたときにやればよい。
- 大学生は学習が第一で、スポーツなぞする暇はない。
- 教養を身につけなければいけないから文化活動をする方がよい。

といったスポーツ活動に対して消極的、或は否定的な意見をのべていたので、これらについて種々考慮の上、

- ① 健康の維持・増進に関連したこと。
- ② 課外生活に関連したこと。
- ③ スポーツについての興味に関連したこと。
- ④ 生活時間に関連したこと。

という4つの観点に整理し、それぞれについてスポーツ実践に反対、或は消極的な人が回答し易いように、とくにスポーツを実践するには条件の遠ざかった意見、調査の結果をつけ加えて設問4題を作成し、学生のもっているスポーツについての理解と興味がどの程度のものであるか、何故あまりやらないのかという事情を追究してみようとしたのである。すなわち、

- ① 健康問題についてやらなくても病気になるいだから、敢えて時間をつくってまでやる必要はないという意見があるがどう思うか。
- ② 教養・娯楽にむけられる時間が多くて、スポーツはレクリエーションとして時折実践される程度であるという調査の結果がでていますが、貴方の場合はどうか。
- ③ スポーツは好きでも、実際にわざわざ時間をさいて、仲間をみつけてまでやる必要はないという説明についてどう思うか。
- ④ 学生々活は学習、アルバイト、又は趣味、娯楽に忙しくて、スポーツをする暇はないと思

われるかどうか。

という内容の問題について、1年生としても学内の経験がかなり深くなると思われる秋学期の最初の体育の時間に、1・2年の文科系の男子学生を対象に、体育教官の指導の下に質問紙法によって実施したのであるが、回答214名分について整理した結果は別表のごとく、

- ① 健康の面からの質問については、「やらなくてもよい」32.6%「やるべきだが事実は困難」23.3%ということ、とにかくやらない者が56%に達しており、「毎日やるべきだ」という意見をのべた者の中で“だから毎日やっている”と裏付けしているものは僅に10%内外で、残りは単に希望意見としての表明ではないかと疑問視されるのである。
- ② 課外生活の内容からの質問については、「レクリエーションとして時折やればよい」という意見の者が74.7%と圧倒的に多い。
- ③ スポーツの興味と実践の程度についての質問に対しては、「仲間を集めて、時間をさいてもやるべきだ」という意見の者が36.6%に対して、「わざわざする必要はない」とする者が54.2%と半数を越している。
- ④ 学生々活時間からの質問については、「暇がないという者が49%をしめているが、そのうち学習、アルバイト或は通学時間の為に暇がないというのは僅に11%で、過半数(38%)は趣味・娯楽に時間がとられて暇がないというのであって、本人がスポーツを実践する気になれば時間的の面では可能な状態にあると考えられる。その上、「スポーツをする暇はある」という者が40.7%という結果である。

明治大学の商学部、政経学部の二年の男子学生について同時期に実施した調査の結果も第1図の通り殆ど同様の傾向を示している。

以上の結果を総合してみると、学生の示した課外のスポーツに対する理解と関心の本質はかなり低いものではないだろうか、実践意欲もかなり弱いものではないかと解釈されるのである。然も余